

掛詞と双関

—日中詩歌の構造に関する一考察—

趙 青

キーワード 掛詞、双関、漢詩、和歌修辞、和漢比較

「掛詞」（「懸詞」とも表記する）に関する最も重要な初期の研究は時枝^①のものである。彼は「一語によって二語に兼用し、或いは前後句を、一語によって二つの異なった語の意味に於いて連鎖する修辞学上の名称」と定義して、次のような例を挙げて、掛詞を二種類に分類している。

兼用：花の色はうつりにけりな徒わが身世にふるながめせしまに
(小野小町・古今・春下113)

連鎖：梓弓はるの山辺を越えくれば道もさりあへず花ぞちりける
(貫之・同上115)

兼用型と呼ばれた例では「ふる」は「経る」と「降る」の二語に、また「ながめ」は「詠め」と「長雨」の二語に兼用されている。一方、連鎖型の例では、「はる」は先行する「梓弓」に対しては「張る」の意味で用いられ、後続の「山辺」に対しては「春」の意味として解釈される。

また、表現効果の観点からすれば、兼用型の掛詞は「協和美」を構成し、連鎖型の掛詞は「旋律美」を構成すると時枝は述べている。即ち、一つの音声によって二つの概念が同時に喚起され、あたかも音楽における和声のような配列をなすものが協和美を作り出す。これに対し、まず一つの概念が喚起され、次にもう一つの概念が喚起され、音楽に於ける旋律的展開を示すものが旋律美である。

柿本^②はその「兼用」型を更に二つに分け、掛詞における片方の意味はその場きりで前後との承接を持たない「響かす」型と、掛詞の両方の意味を前後と統合する「両立」型があると指摘している（後述）。他の掛詞についての研究には根来、増田、後藤^③などがある。

掛詞の認定及び序詞・比喩との境界については現状では、まだ曖昧なところがあるが、共通音声部分に二重の意味を喚起する効果をねらった意識的対比が

その本質であると説く時枝、柿本、平野^④の論説が大きな参考となる。

一方、漢詩では、一つの言葉が二つの意味を兼ねるという定義に対応する表現手法は「双関」（「雙關」とも表記する）である。中国の修辞学における「双関」は、「音的双関」（同音異語）と「義的双関」（同語異義）に分類される。^⑤例えば、

楊柳青青江水平，聞郎岸上踏歌聲。
東邊日出西邊雨，道是無晴卻有晴。（劉禹錫「竹枝詞」）

春蚕不應老，晝夜常懷絲。
何惜微軀盡，纏綿自有時。（「清商曲辭・作蠶絲」『樂府詩集』）

劉禹錫の詩句は「晴」と同じ発音の「情」が隠され、「無晴」（晴れていない）・「有晴」（晴れている）と「有情」（情がある）・「無情」（情がない）を掛けている。二首目は『樂府詩集』所収の恋の歌で、「絲」と同音の「思」が喚起されることによって、「懷絲」（蚕が絲を抱える）と「懷思」（思いを抱えている）の意味がこめられる。また、同詩の「纏綿」は、蚕の絲が絡みつくことと、情愛の細やかな様との両方を表現したもので、同語異義すなわち「義的双関」に属する。

「義的双関」には「句義的双関」も見られるが、一句全体の意味から見て表ではAのことを言っているふりをして、暗にBの意味を指す形式である。このような象徴的な表現は必ずしも共通音声の部分があるとは限らないので、本稿では考察の対象から外すことにする。

掛詞における想の流れ

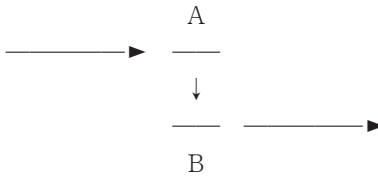
「文選」・「玉台新詠」などを愛読書とした万葉人の歌には、「蓮・恋」のような漢詩の受容による掛詞が存在していた^⑥が、和歌の掛詞の起源は基本的には和歌自体の中で発達してきた修辞法と考えられている。^⑦したがって、古今時代以後の掛詞は漢詩の世界とまったく異なる様相を見せている。柿本と平野を統合した分類方法に従い、掛詞の形を筆者の理解で紹介しておく。

I 連鎖：

わが宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ恋しかりける

(紀友則・古今・恋二564)

「きえ」は上からの続きでは霜の消える意であるが、下へ続く時は、恋しさに死んだような状態となる意の「きえ」となる。図示すると、



矢印は想の流れを示し、A→Bは掛詞による転換を表す。Aまでの想は一旦立ち消え、転換したBからは別の想が流れ出す。

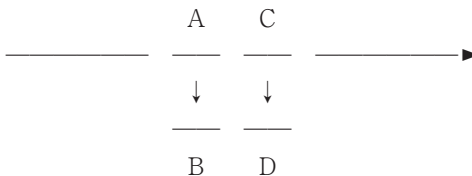
II 兼用：

・「響かす」

わたつ海のが身こす浪立かへり海人の住むてふううら見つる哉

古今・恋五816読人しらず

「立かへり」は波の「立ち返り」Aと人が再び「立ち返り」Bで、「うら見」は「浦見」Cと「恨み」Dの掛詞である。BとDはその場きりで上下との承接を持たない。



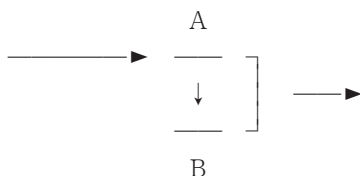
・「兩立」

なき名立ちける頃

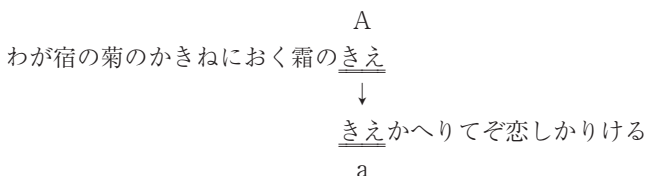
清けれど玉ならぬ身のわびしきはみがけるものといはぬなりけり

(伊勢・後撰・恋三726)

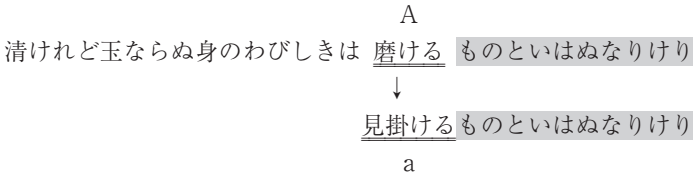
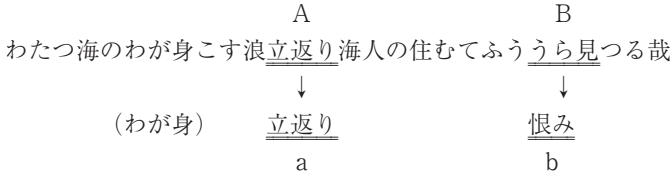
「みがける」は、「磨ける」Aの意と「見掛ける」B（＝姿ヲ見タダケデ逢ツタノデハナイ）の意として両立し、その両意が「ものと」云々に統合されている。



以上が連鎖型と兼用型の基本パターンになるが、一首の和歌で複数の掛詞が用いられる場合、状況はもっと複雑になる。ここまで紹介した図式は、掛詞の形および掛詞に纏わる想の流れを表したものであるが、本稿では、掛詞の対立する二重の意味がそれぞれ前後文との意味に対応するその関係に注目したいので、柿本と平野の図式を参照しながら、新たな表示法を考えてみた。例えば、連鎖型の歌は以下のように表示する。



掛詞をAとa、Bとbの組で表記して、A→aは掛詞の転換を表す。矢印は想の流れを示す他に、掛詞に限らず、文脈の展開の流れを示すことにする。また、文脈から見ると、一つの想の流れを一行にして、掛詞のもう一つの想及びその想と関係する内容をもう一行にする。想の流れを二行に分けることによって、平野が指摘している「自然の想」と「人事の想」との対立がより明確に現れる。同じように兼用型の「響かす」と「両立」を表記すればそれぞれ以下ようになる。なお、掛詞ではないが、掛詞によって兼用されることになる歌の本文は網掛けで示す。



「わたつ海」の歌は、「立ち返り」と「恨み」は歌の表面的な流れと意味的な承接を持たず完全に隠されている。ところが、海・海人・浦は縁語関係にあり、また「海松布」→「見る目」、「浮き藻」→「憂き目」、「浦見」→「恨み」など海の景物に関連する掛詞が恋の心情と結びつけられるのは定番なので、「立ち返り」と「恨み」の二つのキーワードがこの歌を恋の歌として解釈させる。つまり、「立ち返り」と「恨み」はその場きりで上下どちらの句とも論理的な意味関係を持たないが、歌の内容から完全に離脱した単純な言語遊戯の「物名」と違い、「兼用型」掛詞の中の「響かす」という部類に入る。

「清けれど」の歌は、柿本が両立の兼用型掛詞の例として挙げているが、一般に「みがける」は掛詞と認定しないようである。^⑧しかし、「なき名立ちける頃」という詞書があり、また恋の巻に収録されていることから考えると、「磨ける」→「見掛ける」(=姿ヲ見タダケデ逢ツタノデハナイ)の掛詞として理解する方が納得できる。「清けれど」と「磨ける」は「玉」の縁語である。わが身の潔白を玉の清さに喩える表現は、「人事の想」であって、漢詩文に通じる表現で公的な性格を持っている。「見掛ける」ことは男女関係を前提にした私的表現である。二つの想がともに「人事の想」であるが、公的文脈と私的(恋の)文脈に分かれ、想は二層構造であることは変わらない。

掛詞は文の論理的脈絡を断つところにその働きがある、と時枝は述べている。また平野によれば、「自然の想」と「人事の想」という二つの想は「いささかも意味上のつながりはない。一致でも類似でも比喩でもなく、対比ですらない。二つの想を二つながら同時に現出するまでであり、けれどもしかし、そこにこそ和歌の本命があった。口語訳は厳密に言えば不可能である。」これが掛詞

の役割、また特徴とも言えるのだろうが、しかし、上記の図から分かるように、掛詞のこの性質は連鎖型に典型的に現れ、兼用型の歌では時に歌想はより複雑に構成されているように見える。

双関における想の流れ

それでは、漢詩の双関を同じように図示にすると、どうなるのだろうか？

I 連鎖：

管見の限り、掛詞の連鎖型に当たるような双関はほとんど存在しない。

蠟燭有_心還惜別，
替人垂涙到天明。（「贈別 其二」杜牧）

A
蠟燭有_心（還惜別），替人垂涙到天明。
↓
有_心 還惜別 ， 垂涙到天明。
a

蠟燭には「_心」が有ることと、有「_心」——人間のように感情を持っていることとの双関である。一見、想の流れが双関語によって屈折し、「景物の想」から「人事の想」への転換をさせる所は連鎖型掛詞の形に似ている。ところが、括弧で示した「還惜別」の部分は、「人事の想」に属して二行目に位置すると同時に、一行目の「景物の想」においてもその意味を保っている。換言すれば、「蠟燭にもし心があれば、また別れを惜しみ、人に代わって明け方まで涙を垂らすであろう」と上下二句を合わせ、終始ともその主体は「蠟燭」であって、擬人的な用法の中で、蠟燭の「_心」を響かせているとも考えられる。図式を変えると、

A
 蠟燭有心還惜別，替人垂淚到天明。
 ↓
心
 a

むしろ「響かす」兼用型に似ていると言えるだろう。振り返って連鎖型の歌例と比較してみよう。

人々あまた知りて侍ける女のもとに、友達のもとより、「この頃は思定たるなめり。たのもしき事也」と戯れをこせて侍ければ
 玉江漕ぐ葦刈り小舟さし分けて誰を誰とか我は定めん
 (よみ人しらず・後撰・雑四1251)

A
 玉江漕ぐ葦刈り小舟棹分けて
 ↓
指分けて誰を誰とか我は定めん
 a

一首の前半は途中で立ち消えとなり、後半はまったく違う話題が出現して、前半と息を通わせているのは掛詞一つのみである。文の論理的脈絡が断ち切られているため、現代語訳はほとんど不可能であるが、和歌の世界なら許されて十分に成り立つのである。これに対して、漢詩の双関は表の文面上でも、整った形でなければならない——文の論理的脈絡が断たれば、非文となり許されないのである。この大きな特徴の違いをもっと明確にするには、「兩立」の兼用型掛詞に当たる漢詩の例を合わせて考察する必要がある。

II 兼用：

・「兩立」

A A
 東邊日出西邊雨，道是无晴却有晴。
 ↓ ↓
道是无情却有情
 a a

「両立」の兼用型と相似する詩例である。「晴」と「情」は掛詞となっていて、「東の方では日が出て、西の方では雨が降っている。晴れていない（無晴）と言っても、晴れている（有晴）」と表面的に言う裏で、「つれない（無情）と言っても、かえって情が深い（有情）」。双関語の「情」とその上下をつなげて読まない、心情の表現が成り立たない。もう一つの詩例も同じである。

A
 春蚕不應老，晝夜常懷絲。
 ↓
晝夜常懷思
 a

双関はA「懷絲」とa「懷思」の部分である。春蚕より話題を提起して、昼も夜も絲を作ること、昼も夜も思いを抱えていることへと転換させる。景物の想から人事の想への流れを作り出すのが双関の役割である所は掛詞と同じであるが、景物の想と人事の想はきれいに二行に分かれ、各自独立の文として完結できる。すなわち、二つの想によるこの二層構造が対称的に存在し、景物の想が人事の想を覆うような形をとって、それを完全に隠し切っている。なお、このような「両立型」こそもっとも頻繁に現れる双関の定番である。他の詩例をいくつか挙げておく。

蓮子心中苦，梨兒腹内酸。（金聖嘆 句）
 ↓ ↓
憐子心中苦，離兒腹内酸。

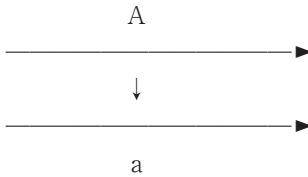
死刑が実行される前に、「蓮子」（蓮の実）の芯は苦い→「憐子」（わが子は気の毒）で心中が苦しい、「梨兒」の中身（核）は酸っぱい→「離兒」（わが子と離れて）で胸が悲しい、と家族へ自分の悲しい思いをこめて詠んだものだという。

高節人相重，虚心世所知。（張九齡「詠竹」）
 ↓ ↓
高節人相重，虚心世所知。

「高節」は竹の場合、ふしが高いことを指しているが、人に使われる場合、節

操が高い、の意味になる。「虚心」は竹の芯がなく中空の状態と、謙遜な人という意味を掛けている。これは同語異義による双関であるため、文字表記は同じだが、「景物の想」と「人事の想」がそれぞれ成り立ち、二行構造にもなる。

以上「両立型」双関の詩例を見てきたが、文脈の流れを矢印で表すならば、二つの想が「並行」していることが分かる。



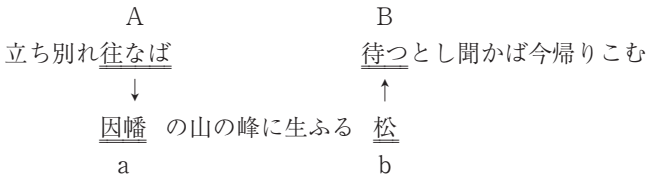
文脈の断絶・断続が許されない詩文では、このように「並行」でなければならない。形から見れば、双関は上記「響かす型」と「並列型」の二つに分かれるが、「並列型」は言うまでもなく、「響かす型」も、一つの想に集中した文脈の流れが終始一貫していて、「響かせた」双関語はその文脈に参加することはない。これと比較して、文の論理的脈絡が断ち切られる和歌を詳しく見てみよう。例えば、

題しらず

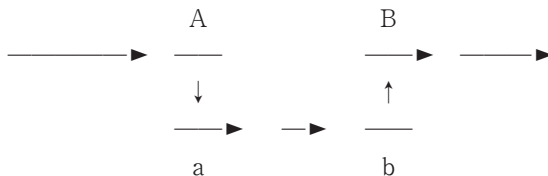
立わかれいなばの山の峰に生ふる松としきかば今かへりこむ

(在原行平・古今・離別365)

掛詞の形は次のように示すことができる。



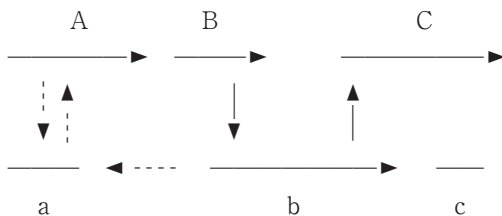
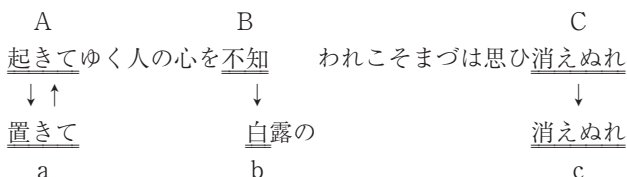
二つの想の意味に沿って文脈の流れを矢印で表すと、次のようになるだろう。



もう一つの例を見てみよう。

起きてゆく人の心をしら露のわれこそまづは思ひ消えぬれ

(よみ人しらず・後撰・恋四863)



「立わかれ」の歌は「往なば」から「因幡」（作者は855年に因幡守）に飛び移り、意味の流れは「往なば」で一旦断たれることになる。「因幡」からはその景物の山が引き出され、更に山に生えている「松」が詠まれる。そして今度は「松」から「待つ」へと転換し、再び元の流れに戻って「立ち別れ」「往なば」で一首が完結する。「起きてゆく」歌は、一行目の「人事の想」が、「人の心を不知」から「白露」が呼び出されて「自然の想」に移り、またすぐに元の「人事の想」に戻る。しかし、この「白露」が翻って初句の「起きて」から「置きて」を響かせることになり、想は二つあるが、歌の流れは一つしかない。掛詞が二つの想の間を行き来して、一つの流れを綯い合わせる。「置きて」「白露の」「消えぬれ」は断片でありながら、縁語として一つのネットワークを形成し、「自然の想」を作り上げる。図では二行に分けてあるが、実際の歌を見ると、二つの想を単

語単位に分解してから、交錯させて一首の中に編み込んだように見えるので、一般的な文法や思考の論理には合致しない。しかし、その反対に、一つの流れが二つの想を途切れ途切れに拾い上げながら、くねくねと一つの歌にまとめ上げていく。文脈の断絶・断続を拒否しないというより、掛詞が文脈を多様に屈折させ、そのくねる美しさを楽しんでいると言えるかもしれない。

漢詩と和歌のこのような違いは何に起因するのだろうか。その大きな要因として、各々の言語そのものの特質が考えられる。漢詩と和歌の差異について述べる時、小島^⑨はすでに以下のように分析している。

「詩」は中国語という孤立語的性格 (isolate) を生かし、その断絶の繰返しをかなでつつ美しいリズムを織り成す。これに対して、「歌」は日本語という粘着性膠着性 (cohesive) を生かし、その連続性を形成する。

中国語は孤立語的性格により、一句の詩の中で、文字単位がそれぞれ独立して互いの束縛がなく自由である。そしてだからこそ、論理的に規則正しく綴らないと、意味が不可解となり文にならないのである。一方、和歌は単語と単語の間に粘着性があり、文が自然にすらすらと繋がっていくからこそ、論理に合わない文脈の飛躍ができるのである。或いは、これこそ和歌の論理だと言えるだろうか。

対句と関連して

前の小節でも触れたが、双関の「響かす型」についてももう少し見てみよう。

・「響かす」

氓之蚩蚩，抱布貿絲。

匪來貿絲，來即我謀。（「氓」『詩經・衛風』）

	A
氓之蚩蚩， <u>抱布</u> 貿 <u>絲</u> 。	↓
	<u>匹</u>
	↓
	<u>配</u>

敦厚な様子の人がにこにこして、布(当時の貨幣)を抱えてきて絲を貿ふ。実は絲を買うのではなく、私を求めるために来ている…双関として解釈しなくても求婚のシーンとして十分理解できるが、更に「布」の計量単位は「匹」で、その「匹」は連れ添うという意味の「配」と発音が近い。したがって、「抱布」は、「良縁を求める」という意味で婚姻をほのめかす。「布」から「配」までは二度の転換を経る。一度目の転換は同音によるものではなく連想によるものなので、厳密な意味での双関とは言えない。「絲」と「思」は同音異義の双関で、「思い慕う」という意味を掛けている。上下とつながりを持たない形から見ると、これは一般的な「響かす型」双関である。

続いて少し特種な「響かす型」双関を紹介する。それは対句の要求による双関である。漢詩文の「対句」は、文字数が同じ上句と下句のセットを指している。相対する二句が文法的に同じ品詞で、且つ意味が対称になっており、例えば上句に地名が用いられたら、下句の同じ位置に対称として使われるものは地名か景物にならなければいけない。この対句形式を利用して、巧妙に双関を用いる場合がある。

廚人具雞黍，
稚子摘楊梅。(孟浩然「裴司士見尋」)

談笑有鴻儒，
往來無白丁。(劉禹錫「漏室銘」)

孟浩然の詩は上句「雞黍」と下句「楊梅」がともに食べ物として対称を成すが、「楊」と同音の「羊」で、更に同じ動物の「雞」と対応させる。劉禹錫の例は漢文の中に見られる対句である。「鴻儒」(学者)、と「白丁」(字を読めない人)が対になっているが、更に「鴻」と同音の色を表す「紅」で「白」に呼応する。このような「響かす型」双関は、その双関語の含まれる文だけでは現れず、それとセットになっている上句あるいは下句を合わせて初めて成り立つ。

またこれと関連し、同じ言葉でも対句によって解釈が違ってくる。「白帝城」を例にして、詳しく見てみよう。「白帝城」は地名で、これに対応するのは同じ地名でなければならないことは言うまでもない。

青楓江上秋天遠，
白帝城邊古木疏。（高適「送李少府貶峽中王少府貶長沙」）

晉室丹陽尹，
公孫白帝城。（杜甫「送元二適江左」）

星落黃姑渚，
秋辭白帝城。（杜甫「季秋蘇五弟纓江樓夜宴崔十三評事韋少府姪」）

以上の例に見られるように、「白帝城」の中の「白」という色の意味を取って、「青」・「丹」・「黄」のような色を含む地名が選ばれている。また、

楚王宮北正黄昏，
白帝城西過雨痕。（杜甫「返照」）

使君灘頭揀石硯，
白帝城邊尋野蔬。（劉禹錫「送鴻舉遊江西」）

のように、「白帝城」の中の「帝」という意味を取って、今度は「楚王」・「使君」が思い起こされる。これは厳密な意味での双関と呼べなくても、「響かす」という意図からすれば「双関的」な用法と言ってもよからう。また、対句による「響かす型」双関は、上句と下句を対照させなければならない点では、「並行型」と共通している部分がある。それは、中国人の対称的・対比的な発想から生まれたものではないか。

まとめ

本稿は和歌「掛詞」の分類法から出発して、それを漢詩に應用し、漢詩の「双関」的表現を再分類して、詩例と歌例を対照させて分析した。

掛詞の「二つの想」（二概念）では、文の前後関係は並行にならず、A概念が

まず単独に登場して、文の進行に従って、a概念が初めて成立する。a概念が成立すると同時にまた、A概念がそこで終わることになる。二つの概念が掛詞によって交錯して、旋律美をもたらす。この美しさは跳躍的で滑らかである。

これに対して、漢詩では「二つの想」が並行して存在し、A概念とa概念が各々自律して整った形になる。並行的ではない文字単位を響かせる場合でも、対句の対称によって姿を現す時がある。尚、A概念とa概念はお互いに干渉せずに、あくまでも平行の形を保っていて、和声美を構成する。この美しさは端正で荘厳である。

注

- ① 時枝誠記「掛詞による美的表現」『国語学原論』（岩波書店1941）第六章
- ② 柿本奨「掛詞のかたち—後撰集を中心に—」（『國語國文』第38巻10号1969.10）
- ③ 松永登代子「新古今集の懸詞と象徴性について」（『國文』第2巻1954.6）、根来司「懸詞」（『国文学 解釈と鑑賞』第6巻1955.6）、増田繁夫「古今集の表現—その知巧性遊戯性について—」（『國語と國文學』第52巻9号1975.9）、後藤重郎「懸詞に関する一考察—」（『名古屋大学文学部研究論集 文学』27号1981.3）、坂本勉「曖昧表現—その基本的性質と掛詞との関連について—」（『文林』第25号1990.12）、大野晃彦「詩的言語とその主体」（『国際文化研究紀要』第4号1998.10）、ツバタナ・クリステワ「はかなき遊びたはぶれにつけても—歌ことばの詩化過程と掛詞—」（『比較文学研究』第76号2000.8）
- ④ 時枝は同①、柿本は同②、平野由紀子「古今和歌集表現論—要としての共通音声—」（『古典和歌論叢』明治書院1988）、「仁明朝の和風文化と六歌仙—掛詞・物名・竹取物語—」（『古今和歌集研究集成 第一巻古今和歌集の生成と本質』風間書房2004）
- ⑤ 楊樹達『中國修辭學 楊樹達文集之一』（上海古籍出版社1983）114頁～121頁参照。尚、『漢文文言修辭學』（楊樹達・香港太平書局1960）は同じものである。
- ⑥ HALLA ISTVA'N（原岩魚）・毛利正守「同音読の掛詞『絲・思』について」（『萬葉』80巻1972.9）
- ⑦ 工藤重矩「平安朝漢詩文における縁語掛詞的表現」『和歌比較文学叢書 第三巻 中古文学と漢文学 I』（汲古書院1986（219～222頁））

- ⑧ 『八代集掛詞一覧』ではこの歌が指摘されていない。「後撰集」歌について、同一覧は『笠間書院 後撰和歌集全釈』・『新日本古典文学大系 後撰和歌集』・『和泉古典叢書 後撰和歌集』など五冊の注釈書による指摘を掲出している。
- ⑨ 小島憲之『古今集以前』（塙書房1976）26頁

参考文献（注に記さなかったものを挙げる）

- 江湖山恒明『日本文学史』河出書房1956
金原理『詩歌の表現—平安朝韻文攷—』九州大学出版会2000
小林路易『掛詞の比較文学的考察』早稲田大学出版部2001
多田一臣『古代文学表現史論』東京大学出版会1998
古橋信孝『古代和歌の発生—歌の呪性と様式—』東京大学出版会1988
钱仲联 総主编《中国文学大辞典》上海辞书出版社1997
鄒化志《中国古代杂体诗通论》北京大学出版社2001
喻守真 编注《唐诗三百首详析》中华书局1999

